

良妻賢母の強迫

——吉屋信子「良人の貞操」論

0 はじめに

「良人の貞操」は、吉屋信子が一九三六年一〇月から一九三七年四月に、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載した小説である。今日、吉屋といえは『花物語』などに代表されるような少女小説作家として知られているが、吉屋はそうした少女小説の時代を経て、昭和初期には新聞小説や婦人雑誌の世界でも大きな成功を収め、流行作家として一時代を築いていた。以降、吉屋は戦後にわたって多くの作品を残しているが、「文学」としては長く傍流に置かれ続け、いまだ本格的にその創作の総体を論じられることの少ない作家である。特にこの全盛期とも言ふべき新聞小説や婦人雑誌での連載長篇小説についての個別の検討はいまだ充分にされてはいないだろう。

現在の吉屋信子研究は、主に少女小説作品のもつ可能性を再評価するものと、反対に従軍作家としての戦争協力を批判するものとの二分された印象がある。こうした各時代の仕事につい

ての検討も、さらに重ねられるべき問題であることは確かだが、この相反する二つの評価のあいだを問うてみることもまた重要であるだろう。この過渡のなかに、吉屋信子のまた別の評価の可能性があるのでないだろうか。

吉屋の長篇小説のなかでも、この「良人の貞操」は代表作の一つにも数えられ、単行本がヒットしただけでなく、映画化や舞台化などもされて空前の人気を博し、一世を風靡した小説である。^{注1} 本論では、まずは小説テクスト以外の展開をも含めた「良人の貞操」が、どのように受容されていたかを見ていく。

そしてその上で更に検討したいのは、この「良人の貞操」について、広く流通していた解釈やイメージ、それらと実際のテクストに描かれているものとのズレである。というのも、この小説に登場する様々なトピックは、周辺の同時代的言説と連動して、多くの人々の関心を集める求心力となると同時に、そのトピックの類型的な部分だけが拡大され、小説テクストを離れて読まれてしまう事態を引き起こしてしまつていたと考えられる

竹 田 志 保

からである。

いくつかある先行研究では、この小説に関してはタイトルにあるように「良人の貞操」を問うたことが斬新であったという評価と、女性同士の強い友情が評価されるのが常である。^{注2}しかし「良人の貞操」がどのように問われ、どう解決されたのかはもつと詳細に読まなければならないだろう。このテキストにはそうしたテーマに回収し得ないような、いくつものきしみが存在しているのである。

一 「良人の貞操」ブーム

「良人の貞操」が発表された頃の吉屋は、新聞や婦人雑誌で、常時連載を掛け持ちで抱えているような状態であり、既に作品の映画化や舞台化もいくつかなされてきた。その他にも少女小説や、婦人雑誌の座談会などでの露出もほぼ毎月のようにあり、かなりの影響力があったことがうかがえる。

この小説だけに限っても、連載と平行して、映画の記事や舞台の記事が新聞紙上を賑わせていた。「良人の貞操」は、新聞や単行本のような小説テキスト以外にも、幅広いかたちで大量の享受者に受容されていたのである。それら多くの享受者たちが、実際どのようにこの「良人の貞操」を受容したのかを明らかにすることは困難であるが、この小説の特徴を五項目に分類し、その特徴と人気の関係を論じた青野末吉の同時代評から、当時の受容のいくつかのパターンを推測することができる。

一、作者の立場に女性的な純粋さがあって女性としての作

者が、つねに人物や事件に寄り添って立つてゐること。

二、男性作家や中性的作家において見られるのとは別個のエロチシズムが全編に充満してゐること。

三、描写、表現が粗放で生々しく、いはゆる文学的洗練を経ない所に、ある世俗的な直接性を持ち、かつ作者の余計な心づかひによつて、テムポをおくらせないこと。

四、作中人物の型が常人的、類型的であり、かれ等の晒し出す事件が、普遍的な性質をおび、一般読者が容易に自分とその人物に移入し、自分を事件の当事者に置き換へうること。

五、作者の提示する事件解決の道徳が、身上相談的の一般性をもち、人間の美質に訴へた新しい^{注3}扮装の下に、結局、既成の良俗に合致していること。

青野が筆頭に挙げているような、女性の視点や立場から考えるという点が、女性たちからの支持を得る大きな要因であったことは間違いないだろう。それまで専ら女性に問われるものであった「貞操」の問題を男性の側にも問いかけたという点などもここに含まれるだろう。^{注4}

また、非常に細やかかつ具体的に描かれる日常の描写のなかには、女性たちへの一種の生活指南書として、関心を惹き付けるものがあつたと考えられる。こうした日常生活の細部のリアリティが、それぞれの登場人物への共感を可能にしていく重要な役割を果たしていたのだろう。

次に、「エロチシズム」が指摘される。この点は、特に加代

の人氣の高さに関わる。後ほど詳しく検討するが、加代は、美人で器用な、また非常に趣味性の高い女性であり、しかもいわゆる「未亡人」でもあるという点においても、男女問わず高い関心を持たれた登場人物であった。新聞記事や広告においては、しばしば加代が中心化され、「うらわかき美貌の未亡人が辿る愛慾の苦惱に満ちた人生行路^{注5}」というような「未亡人」の不倫恋愛物語という設定で語られていることが多く見受けられる。「未亡人」への性的な視線、特に加代と信也が関係を持つにいたることへの期待は高かった。ここからはとりあえず、この小説が、先に挙げたような女性読者だけではなく、男性の側の快樂、性的関心によっても読まれていたという可能性が指摘できるだろう。

次に注目したいのは、「事件が、普遍的な性質をおび、一般読者が容易に自分をその人物に移入し、自分を事件の当事者に置き換へうる」という読み方である。たしかに、この小説においてはしばしば個別の悩みを捨象して、「男」や「女」、「結婚生活」というような次元に問題を抽象化して提示していくという方法がとられている。

さらに、周辺記事や広告を見れば、連載中から既に各登場人物が類型化されていることがわかる。その上でファンは「加代子党」「邦子派」というように分化しており、ここにはそれぞれ自分の立場から共感・支持できる人物に感情移入・自己投影をし、小説内の事件を自分に置き換えて捉えるというパターンでの受容が想定できる。たとえば、映画版の監督である山本嘉

次郎は、演出に当たって周囲に意見を聞いたところ、「まだ世間も知らないやうな若い娘達は一樣に邦子ファン」であり、「人生も、世の中つてどんなものか知つてゐるやうな芸妓だとか、女給さんは加代ファン^{注7}」であると概括している。

単行本刊行時の広告にある宣伝文には、こうした参加型の読みへの誘導は更に顕著である。そこでは、積極的に読者と問題を共有させ、この小説にそうした問題の解決の方法を読むことまでが推奨されているのである。

女から見た男の貞操問題―妻ある男の貞操―良人に愛人の出来た場合―妻子ある人に思はれた場合―そして若い未亡人の愛欲の悩み―かうした事実が此の小説でいかに解釈されいかに波瀾を起したか。

わたしは断然加代子党！／僕は信也に同情する！／私は邦子派だ！／全国的の大評判！（中略）

夫の道妻の道そして男心の裏の裏！／女美しくして此罪あるを知れ！

今や良人の貞操時代。これを読まぬと時勢遅れです。^{注8}

しかしこうした参加型の読み方は、一面では小説で描かれている個別の過程を離れて、その設定だけを用的ながら展開されていく可能性がある。映画版や演劇版での展開や結末が小説とは違うものとなっているのも、こうした読みの偏差として発生しているともいえるだろう。^{注9}

最後に挙げられた、解決法が「身上相談的の一般性」をもち、「人間の美質に訴へた新しい扮装の下に、結局、既成の良

俗に合致していること」というのは、この小説の結末への評価として、後年においても指摘されている点である。たとえば、田辺聖子は「小説の後半部分、邦子の手ぬかりない処置がいかに優等生めき、修身教科書めいて、現代読者からみればつまらない」と、女性同士の友情の強さを評価しながらも、邦子の始末の付け方には不満をあらわしている。この点については、同時代に山川菊栄が特に厳しく批判をしている。

大阪の某高女では、吉屋信子氏の小説『良人の貞操』を生徒の読物として推奨することにしたといふ。美人で、儉約で、世帯持ちが上手で、良人のかくし児を自分の子として育てるといふまことに男に都合の好いこの小説の女主人公にあやかる娘さんが多くできれば、この女学校の卒業生には、お嫁の申込みが殺到することだらう。(中略)／それほどに妻の貞操といふものは、絶対的なものとして認められているのである。社会的に弱者である女の不貞はゆるされず、強者である男の不貞には寛容なれと教へてゐる点で菊池氏も、その発明する男女同一道徳標準を裏切つてゐられる。菊池氏や吉屋氏が封建的な論者と違ふ点は、封建主義者は、夫への寛容を妻の責務とし、当然の道徳とするに反し、それを功利的な見地から弱者としての妻の利害の打算から必要としてゐられる点である。こゝに封建的な道徳から資本的なものへの推移が窺はれる。がどちらにしても、婦人の隷屬そのものに変りのないことはいふまでもない。

この邦子のとつた「男に都合の良い」とされる解決が、「良妻賢母」といったような当時の既成道徳に合致したものであるというような批判は、しかし当然、別の側面からは肯定的に受けとめられていたことも忘れてはいけないだろう。ここからは、賛否は両論ではあるものの、ともかくこの邦子による解決が、当時の「良妻賢母」というような規範と一致するような、模範的な「妻」の姿であるとして認められていたということが出来る。

「良妻賢母」思想は、一面では女性を生産労働から切りはなされた家庭に拘束するものとして批判されるものであったが、しかしもう一方では、女子教育の制度と結びつきながら、女性の地位を一定程度向上させるものとして女性たち自身に歓迎されていたものでもあった。小山静子は、一九三〇年代に「良妻賢母」思想に再編があつたとして、以下のように述べている。

従来の良妻賢母思想においてももちろん、精神的な面における、男とは違つた「女の特性」が存在すると考えられていた。しかし、それは家事や育児という家庭内役割において発揮されるものであった。がここに至り、従来の文明の欠陥を補つて、完全な文明の形成に努力するにしろ、社会事業に従事するにせよ、いずれにせよ、その「女の特性」は社会に向けて直接的に発揮すべきものと期待されるようになっている。いわば精神的「女らしさ」が、家族に対する私的な価値をもつだけでなく、社会的にも価値づけられることとなつたのである。そしてこのことは、家事を

通しての關係性しかもちえなかつた女に「女らしさ」を通して、直接的に社会とのつながりを確認しうる回路が拓かれたことを意味していた。^{注12}

この頃には、女性特有の精神性を發揮することによって社会全体を向上させていこうとする発想が登場し始めていたのである。しかしこのことは必ずしも実際のな女性の社会的地位の向上に直結するものではない。小山はこの発想に女性の「経済的問題」についての意識が欠落していることを指摘し、「女らしさ」に社会性を付与することによって、良妻賢母思想が本来もっていた、男女は対極的存在ではあるが同等であるという「幻想」を、より一層強めていったのである」と述べている。

こうした女性の精神性の高さを發揮することで、男性を変え、社会をも向上させていこうという意識は、吉屋の発言のなかにも散見される。たとえば、「男の貞操」という問題について、連載終了の頃の『婦人公論』誌上の対談において、吉屋は「女を不幸にする男といふものは誰が生んだかといふと女でせう、女が他日若い女を苦しめ、貞操を棄すやうな次の時代の男の子を生み出してやうなものでせう。だから、女が自覚して男の子を家庭教育で厳格に育てるだけでも随分と違ふと思ふの」、「女性が目覚めなくちやだめなの。女性が息子に信頼させる気高い女になつて、同時に女性全体を尊敬させるようにしなければ。」^{注13}などのような発言をしている。

このように、吉屋は積極的に女性を啓蒙していくような姿勢をしばしば見せており、その意味では、この「良人の貞操」と

いう小説もまた、この女性への啓蒙という意図に基づいて展開されていると考えられ、その結末の問題解決の仕方が、同時代の「良妻賢母」的な発想に近づくことも不思議ではないかもしれない。

しかし今日改めて実際のテクストを読んだとき、当時「良妻賢母」的と判断されたこの邦子の最後の解決の仕方が、本当に「良妻賢母」思想に合致しているのかということは改めて検証されなければならないだろう。というのも、吉屋の意図するところと、書かれたテクストとが必ずしも一致するわけではないからだ。むしろこのテクストは、吉屋の意図とは別に、彼女の無意識にあるジェンダー的な違和感や、さらには悪意にすら満ちているのではないか。以下、実際にテクストを読みながら検討していく。

2 邦子と加代

邦子は、元通信省の官吏の娘であり、女学校卒業後に水上信也と結婚した主婦である。良人の信也は石鹼工場内の研究所に勤めるサラリーマンであり、彼らはいわゆる「新中間層」といわれる階層にある夫婦である。「新中間層」とは家業をもたず、俸給によって夫・妻・子という小単位での家庭を営み、そして西洋風のライフスタイルを目指すような、まさに当時台頭していた階層であつた。^{注14}

良人のために懸命に努力しつつも、邦子は「結婚生活」や「主婦」業に疑問を感じている。ここで注目されるのは、良

人・信也に対する直接的な不満としてではなく「結婚」や「男」、「女」といったような一般化されたかたちで不満が提示されている点だろう。

男には結婚しても、しないでも、社会だの国家だの、やれ人類だのと論じたり考へたりする余裕が有るのに、女はいつたん結婚したら最後、宇宙も国家も社会も全人類も消え失せて、たゞ一にも良人、二にも良人だけとなり、良人を喜ばせ、仕へる為の、台所と鏡の前だけが、その全世界となつてしまふといふ事実を、邦子は此の足かけ四年間、身を以つて体験したからだつた。

(女つて、みんな、これでい、のかしら?)と、折々は首をひねつて見ても、さて、そんならどうすればい、かといふ解決は、わからなかつた。

そんなら自分は、どうすればい、のか、何を良人に要求すればい、のか、それはわからない——でも、昔も今も変りなく、(主婦)と言ふ体裁のい、名が、実は良人の万年女中に毛の生えた実在に過ぎないような情なさ^{注15}が、度々森と胸につかへる時があつた。(一九三六年一〇月九日)

こうした悩み的一般化・抽象化には、やはり読者からの共感を得やすい効果があつただろう。鹿野政直は、当時の「新中間層」の「主婦」という存在が、舅姑との関係や、家業労働から解放された憧れの生き方となる一方で、「中流」としての自覚感、閉じこめられ無力化された存在としての不安感と、じつは裏腹の関係にあつた」とし、「女性ジャーナリズムは、「中

流」幻想と「中流」なるがゆえの不安感とを満載して^{注16}い」たことを指摘している。

邦子の悩みは、当時の雑誌や新聞にみられるような「身の上相談」的な言説と対応している。こうした設定が、読者に小説世界を非常に身近なものと感ぜさせているのである。

ただし、邦子の悩みにも関わらず、信也と邦子は、周囲からは「模範的」な、「家庭円満」の夫婦であると思なされ、邦子もまた終始「利口な奥さん」、「良妻」といった形容で語られている。メディアの上で繰り返されるような標語によって理想的な家庭と目されながら、同時にそこに生じるありふれた苦悩もまた共有している。さらにそうした小説世界の外側には、同じような読者との往還関係があつたといえるだろう。

またここで同時に注目されるのは、周囲はしきりに邦子を「良妻」と見なしているが、実際の邦子はそうあるためになりの努力をしつづけているという点である。ただしこれは必ずしも要求されているだけではなく、邦子自身がその規定を要請しているのだともいえるだろう。^{注17}

次に加代であるが、元々加代は深川の裕福な材木問屋の出身であつたが、震災で両親を亡くしている。邦子とは女学校時代からの親友である。女学校卒業後は百貨店で働き、その後、信也の従兄・民郎と結婚して、九州の炭坑に暮らしていたが、民郎の死去によって東京に戻ってきたのである。

おりにふれて邦子と加代とは「正反対」と形容される^{注18}。両者には、単純には性格上の違いがあるが、注目すべきは、邦子が

努めて家事や夫の世話をしているにも関わらず、良人に認められていないのに対して、加代は自然にそつなくこれを行える人物であるという点である。料理や食事の知恵なども加代の方が長けている。たとえば、小説冒頭の印象的な朝餉の場面において、洋食に失敗していた邦子に対して、のちに加代が信也に見事な洋食を用意する場面が対置されている。さらに二人が料理などをする場合には、加代が邦子にアドバイス、ないし注意をする場面がいくつかある。

「邦子さん、どんな風に番茶使つてらつしやる——すししあ……おいしくないわ」

「ほうじ茶つての買つて来るのよ、あなたは？」

「わたしんち、お祖母さんがして居たやうに、上等の荳茶を斤で八十銭ぐらゐの安いのと、半々に混ぜて、ほんがり焙じて颯と淹れるのよ」

番茶ひとつのにも、加代はなか／＼面倒だつた。(一九三六年一月三〇日)

また、両者の対比で最も強調されるのは加代の趣味性の高さである。服装や、身のまわりのこと、美意識において、邦子がほぼ無頓着であるのに対して、加代は常に優位性を示している。

ただし、加代のこうした側面は、「芸者」や「酒場のマダム」のような職業の女性たちへの視線とも近接しており、それが魅力ともなれば揶揄や批判の対象ともなっている。特に男性たちは加代の振る舞いや格好について「芸者」と形容し、好奇のま

なごしを向けるし、一方女性からも、たとえば邦子の妹・睦子は、邦子と比較して加代の「おしやれ」を「贅沢」として批判している。

加代については、同じ事象についても、しばしば両義的な評価が発生してしまうのである。この加代が蒙る批判について、彼女を擁護するのは邦子である。邦子と加代のあいだには、「互いに信頼し、擁護し合う連帯関係があるのは明らかだが、しかし邦子もまた加代の完全な理解者ではない。むしろ両者のあいだには誤解と競合関係があるといえるだろう。」

たとえば、「芸者」といったような加代へのカテゴライズに対して、邦子は加代の「女学校卒」という自分との同質性を常に強調し、男性たちの性的な視線を否定している。そうであるからこそ、邦子は加代が信也と関係を持ったことが発覚したとき、「芸妓とか女給とか言ふならともかく、貴方はちやんと私と同じ女学校を出て」^{出立}いるにもかかわらずという点から怒りを露わにしているのである。

この「女学校卒」という観点からいえば、加代の「家事」の能力などは、「良妻」という基準において、邦子より優位にあると位置づけることもできるが、しかし加代のこうした知識や趣味といったものは、女学校の良妻教育というよりは、彼女が深川出身であることの方によくを負うものであり、さらに「百貨店」での売子子の経験などからも影響を与えられていると考えられる。同じく「家事」にまつわる事柄であっても、両者の基盤や慣習、価値観はかなり違っているのである。

また二人のすれ違いは、言葉の使い方において頻出する。たとえば加代の現状について、二人は次のような会話を交わしている。

「これも、貧乏後家さんのひがみつ根性よ」

「加代さん後家さんて言葉、感じが悪いわ、およしなさいよ」

邦子がたしなめた。

「あら、い、ぢやないの、未亡人つて言へつての、だつて未亡人つてのは、亡なつた旦那様の保険がたんまり転がり込んで、若い燕連れて自動車でダンスホールへ行ける御身分かなんかなのよ、私みたいにアパートで稼ぐのは、後家も後家、下々の下の部よ」(一九三六年一月二七日)

「後家」と「未亡人」という呼称の差は、同じ事柄を示すものでありながら、加代と邦子の認識の仕方が異なっていることを示している。これは自己認識と、他者からのカテゴライズのズレを示しているだろう。

特にこの「未亡人」のイメージは、小説内で加代がまなざされる場合にだけでなく、小説が流通する際にも最も強く働いていたコードである。当時の「未亡人」に関する言説からは、「未亡人」が「貞婦二夫にまみえず」という道徳観念を要求されると同時に、肉体的な欲求不満に悩まされ、常に異性の誘惑にさらされている存在と見なされていたことがわかる。^{注20} こうした他者からの視線に対して、敢えて蔑称的な「後家」を称することは、他者からのカテゴライズへの抵抗ともいえるだろう。

加代の有している慣習や文化は、複雑で不安定な振幅をもっており、単純な類型化では捉えることが難しい。また加代自身でも、はっきりとした自己のアイデンティティを実感することができず、だからこそ彼女は職業を求めたり、信也との恋愛に向かったりすることに自己を投企していたのではないか。^{注21}

以上のように、邦子は他者から期待される自己像を積極的に目指し、加代には他者から押しつけられる自己像への違和感、抵抗がみとめられる。登場人物はただ類型的な人物なのではなく、そこにはアイデンティティにまつわる困難と葛藤の過程が見出せるのである。

3 「母」のグロテスクさ

小説は、信也と加代が関係を持ち、それが邦子に知られる辺りから、佳境を迎える。その展開において重要なのは、信也が問題の解決の主導権、決定権を全面的に邦子に委任しているということである。

「——邦子、もう少し冷静になつて呉れ、そして僕を救つて呉れ、頼む——そして加代さんも救つてやつてくれ、今は、たゞ——お前ひとりの判断と処置で、この苦しい問題は救はれるか、破れるかだけなのだ！ 自分の生涯の唯一の大切な妻と思つてかうして頼むのだ、邦子——」

信也は、まご、ろ籠めて、男の涙を浮べて、まつたく声涙降る態度で、今は男の体面も意地も、男性の伝統的の女性への支配感情や優越感のすべてを素直に、擲つた。

邦子は言葉もなく暫し——心に苦しみ悶えて考へて居た。

「——貴方！ 私、今はどうしても、貴方の妻としては、口惜しく情けなくつて、冷静にはなれません……でも、考へました。貴方の妻だと思つては、とても許せない——でも、貴方のお母さんと自分を思へば、悪い息子を持つた母の気持ちになつたならと考へたのです……私、出来るだけさうなつたつもりで、今夜ちつと考へて見ます——」

(一九三七年二月三日)

そして同時に、信也はここで男性を代表するようなかたちで謝罪をしている。こうした大きなかたちで投げかけられた問題に対して、邦子が設定するのは「母」という視点での解決である。さらに、この「母」としての視点は、信也に対してだけでなく加代にもまた適用され、ここからは、「男性」や「莫迦な子供」に対して、ただの「妻」ではない、「賢い母」としての邦子が仮想的に設定されるのである。そこにおいて邦子は、信也よりも、加代よりも優位に立ちはじめ。

この「母」という視点で何故解決が出来るのか、論理性は不明である。ともかく、ここでの「母」とは非常に理想化された存在であり、清く高い精神性が強調されている。

前出の小山静子の論によれば、第一次大戦後には「母性」という新しいキーワードによって、女性の「母役割」が再度強調されたことが指摘されている。^{注22}「母性」は身体的な機能と、精神的な愛情とともに、「女の特性」として、「自然が女に与えた

もの、先天的に女に備わつたもの」として、女性に強固に結びつけられていった。そして「母」であることが女性と国家・社会への直接的な参入を可能にしていつたのである。こうした同時代の言説の再編も、小説に重要な影響を及ぼしていたと考えられる。

また、ここでこの小説の主要人物たち全てが、既に「母」を亡くしていることにも注目してもよいだろう。この小説では、信也と加代は幼少期に両親を亡くしており、邦子の母親も二年前に死去したという設定になっている。唯一、父・母・子の組み合わせが存続している家庭としては、邦子の姉・安子の家庭があるが、安子は良人・義三郎と合わせて俗物的な性格を強調され、批判的に描かれている。小説内には直接の参照項となりえるような理想的な「母」の存在が不在になっているのである。だからこそ「母」に過剰な期待が託されていくのではないか。

その期待を邦子が現実化するのには、加代の妊娠が発覚したときである。このことによって邦子の「母」という立場は一時揺らぐが、しかし最終的には、加代が子どもを産んで、その子どもは邦子に育てられることが正しい選択であるとして落ち着く。そして邦子は、この加代の妊娠・出産のプロセスに同一化することで「母」になろうとするのである。

ここで重要なのは、加代の出産を邦子が世話するということと、その金銭的な主導権は、信也ではなく邦子が持っているということである。それに際して、信也は邦子に「完全に頭があ

がらなかつた」という状態にある。

さらには、性的な主導権もまた邦子の側にあることが示されていく。

何から何まで堪へ忍んで心を折り、我慢を重ねて呉れる此頃の妻を思へば、信也はその夜の妻の姿が、たゞいちらしく、しんからいとしかつた。彼は思はずその妻の手を引き寄せた。

——良人の胸に軽く支へられて、その接吻は嬉しく受けたが……邦子は、良人の抱擁の手から、柔らかに身を退いたので……。

「……貴女……加代さんは……今貴方の子を身体に大事に持つて、長い間あ、して……苦しい切ない気持で……居ると思ふと……私……あのひとのお産の無事にすむまで……貴方も私も……せめてもの、心づくしに……わ、わたくしが子供を生む身と思つて……」(中略)

邦子は良人の額に、熱くくちづけた。過失も出来事も、すべてを越えて、良人と妻の魂の結びは、幾年を経て、今ぞ動かし難い絆だつた——肉体を越えて、より高き人間愛の同行二人の人生の巡礼として……。(一九三七年三月九日)

ここで邦子は信也からの性行為の誘いを断つている。ここで邦子は身重の加代の身体に自己をシンクロさせている。そしてこれが精神的な次元での高潔さの獲得に結びついているのである。更にいえるのは、このことによって信也もともに精神的に

向上するのだということを描きながらも、同時に実際にはこれが妻による良人の「去勢」の意味を持つ場面でもあるということである。「良人の貞操」という問題提起の結論がここで示されているといつてもいいだろう。

そして邦子は、加代の苦しみに一体化するようにして擬似的に出産を経験する。

加代が蒼白く寝れて、美しい顔の長目の優しい眉を纏めて、苦しさに雪を含むにも似た、真白のガーゼをきりぎりすと哀れに艶な糸切歯に必死と噛む顔は——邦子の胸を打ち、不断の彼女より、もつと緊張した切ない美しさを受けた——それは烈しい崇高な一種の美だつた。(中略) 産婦の受ける苦しみも痛みも、それが同時に邦子の肉体にも精神にも伝はり、邦子は今自分自身が生みの苦しみを、如実に味はふ気がした。(中略)

さう一言ふと、邦子は頭がふらく／＼として、いきなり倒れかかつた——さながら、今自分が出産を終つて、一時に気もゆるんだやうに——(一九三七年三月一二日)

こうして邦子が獲得していく「母」というものが、「良妻賢母」思想が説いたやうな「自明」で「自然」なものとしての「母」といかに距離があるかはあきらかだろう。「母」の尊さを過剰に信じ込んでいる邦子は意識しないが、そこでは「自然」なものとしての「母性」とは、かけ離れた操作が必要とされてしまつていたのである。

また、邦子が自分自身ではなく、加代に出産させることで

「母」になろうとすることの裏面には、妊娠や出産に対するプレッシャーや恐怖も隠されているということができるだろう。このことは、邦子が「家庭円満」の「良妻」とは見なされながらも、常に子供のいないことを指摘される場面が繰り返して登場することや、出産によって妊婦が受けるリスクの大きさが度々強調されていることから推察できる。^{注24}

さらに、邦子が「母」になるということは、金銭的な主導権や、性的な主導権を良人から奪うことともなっており、これは良人―男性の領域を侵害するものでもある。「男に都合の良い」と読まれたような「良妻賢母」像を一面では実現させながらも、邦子は同時にその理念を自壊させてしまうような存在となっているのである。

一方、加代は、突如現れた由利準吉という男と再婚し、最終的にはマニラに渡る。この展開は、「良妻賢母」として自己実現を果たした邦子の影となつて残り、テクストの安定を揺るがす存在である加代を別の世界に放逐することでもあるが、加代は単純に「外国」に消去されるのではなく、彼女もまた「人妻浄土」に至ることで、過去が清算されようとするのである。

だからこそ準吉は加代の良人として相応しいように設定されている。材木問屋の娘であった加代に対して、準吉も材木業である。また準吉が「私生子」であり、加代に自分の「母」を見ているということは、一方で信一（信也と加代の子）と見ているという子（子）を補う意味もあるだろう。ここで加代も「母」として回復し得るのである。そしてこの「マニラ」という設定の唐突さ

が、加代の過剰さに対応する過剰さを準吉に与えている。

この小説において「マニラ」という設定をどこまで重要視すべきかは難しいところである。実際、日本からフィリピンへの移民は明治末期から盛んになり、麻栽培を筆頭に、^{注25}土木工業、漁業、商業などに多くの日本人が従事していた。しかし準吉登場時の章題は「月から来た男」である。この「マニラ」という設定は、その地の個性性が要求されたというよりは、未知の地のエキゾティックな雰囲気と、船旅やパーティの場面のような華やかな暮らしを描くために必要とされた設定ではなかったか。^{注26} 加代の再生に必要なのは、「マニラ」の持つ未知の可能性であり、そこで得られるはずの新たな自分のイメージを信じていることである。

青い海と、さわやかな太陽と、そして不思議な童話の国に咲くやうな花の色に――加代は未知の国に一步入つた夢心地で、船酔いも完全に忘れて、身体がしやんとした。

（中略）

この香港の異国情緒の風景と匂ふやうな空気に生れて初めて身を置いた加代は――自分の身内の血が徐々に更新してゆき、何か漠然と前途への新しい望の意力が湧くのを、自分でも感じた。

今まで、ついで知らなかつた強く生きる希望！（一九三七年四月二二日）

加代はここで「私お陰で身体が造り変えられたような気がしますわ、――これから、私、英語を習って、そして洋服着るお

稽古にかかるつもり！」と、ほぼ「外国人」となることを宣言する。日本において安定できなかった加代のアイデンティティは「外国」に投金されることで棚上げにされるのである。

小説の最後の場面は「女学校」の「クラス会」の場面となっている。ここで邦子が語る加代の履歴の省略の仕方、そして続く級友たちの暮らしの悩みの語らい方には注目すべきであるだろう。

「あ、加代さん——あのひと、デパートを間もなくよし、水上の従兄弟と結婚して、福岡の炭坑に住んで居りましたの、それが、旦那様に死に別れて、子供を連れて——暫く東京にも戻つてましたのよ——そして去年の暮に再婚して、今はマニラよ」(中略)

それから、引き続いて級の誰彼の噂が始まり、話はだん／＼、子供の病気難の話、よい女中が無いと言う女中難の話——よもやま続いたが——生活難の話は出ない。そう語るべき境遇の人は、クラス会などには出る余裕がないから……(一九三七年四月一五日)

ここには、邦子と同じ教養・生活レベルにある「新中間層」的グループにおいて、それぞれの内にある個別の困難や問題は隠蔽、捨象して、ありふれた悩みと「世間体」を保つことへの強迫観念がはたらいているように思われるのである。

4 おわりに

「良人の貞操」は、当時の支配的な言説と密接に連続し、そ

の類型的な枠組みに沿っているようでありながら、必ずしもそこだけには回収できない様々なしみを持っている。

登場人物に対しては、常に何らかの類型化、カテゴライズがつきまとっているが、邦子のように「妻」・「母」といった、期待される像を積極的に受け入れ、目指していく女性が描かれる一方で、加代のように様々なカテゴライズの間で揺れ動き、そのいずれにも安定できない女性が描かれている。

こうしたしみは、吉屋の意図したメッセージではなかったであろうし、当時の読者に読みとられた可能性も少ないだろう。吉屋はあくまで女性の高い精神性が、女性と、そして男性をも救うという理想的な物語を紡いだはずである。そしてその展開における飛躍や過剰さは、大衆的・通俗的な仕掛けと見なされてきたが、ここにこそ、吉屋の意識と、無意識の決壊があるのではないか。

また、同時代における「母」のイデオロギーの強化は、この小説の展開に強く働いており、こうした方向性が、のちに従軍作家として銃後の女性たちに影響力を発揮していく吉屋の今後に繋がっているということは事実であるだろう。だが、このテクストにはそうしたイデオロギーの強引さそのものもまた刻印されているのである。

邦子は自他共に認める「良妻賢母」として自己実現を果たし、そこに回収不能になった加代は、最終的には再婚と、「外国」に放逐されることでその過剰さを解消されており、物語は安定したかのように見える。しかしこの邦子の「母」による解

決という飛躍、その明らかな無理を通して自身を納得させていく過程には、むしろそうした理想像に応じることの矛盾と困難の方こそが刻まれ、しかしそれを露呈させることなく隠蔽していく過程が描かれている。つまり、このテクストは、女性をめぐる様々な視線や要求、規範への亀裂となりうるものをも持っているのである。

そこには当時の吉屋に対する周囲の視線も無関係ではないはずである。当時、吉屋は最も成功した女流大衆作家の代表として、賞賛と、そして一方では強烈な揶揄の対象となっていた。その莫大な収入と、女性パートナーと暮らすという吉屋の暮らしは、「男顔負け」という言葉で表現されるような男性の領域の侵害であり、男たちを苛立たせたことは想像に難くない。^{注28}吉屋の意識的な方向性とは別に、こうした周囲の視線に対する違和感や抵抗が、この「良人の貞操」という小説には響いているのではないだろうか。

「良人の貞操」は、その時代性を強く刻んだ小説であるがゆえに、同時代において支持され、また時代の変化とともに忘れられてしまった小説であるが、しかし今日改めて読んでみれば、ここからは同時代には気がつかれなかった様々な問題が、また同時代の評価とは違うかたちでの評価の可能性が浮上してくる。その意味で、「良人の貞操」という小説、そして吉屋のその他の「大衆小説」も、今後更に検討される必要があるだろう。吉屋信子にはまだ改めて読まれなければならない、いくつもの小説が残されているのである。

注

1

映画版はPCL製作、東宝配給で、前篇「春來れば」(一九三七年四月一日封切)、後篇「秋ふたたび」(同月二日封切)の二部に分けて製作された。『キネマ旬報』(NO. 六〇八、一九三七年四月二日号)掲載の鉄仮面「春の興行展望」によれば、「封切十日間総計は日劇、東横で五万円を越へた」とある。舞台版は、同年三月に大阪の歌舞伎座・角座にはじまり、四月に東京・明治座、青年歌舞伎の新宿第一劇場、浅草常盤座の笑いの王国等の他、映画館でのアトラクションとしても上演された。大阪では喜劇、漫才などにアレンジされたものもあった。

2

佐多稻子「良人の貞操」という題名(『吉屋信子全集』5月報、一九七五年二月一五日、朝日新聞社)、吉武輝子「女人 吉屋信子」(一九八二年二月二〇日、文芸春秋)、駒尺貴美「吉屋信子―隠れフェミニスト」(一九九四年一月一五日リポート)などを参照。

3

青野季吉「良人の貞操」論―通俗小説の人気の問題」(『東京日日新聞』一九三七年五月八日～一日)

4

当時の「貞操」観については、赤川学らによる研究がある。赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』(一九九九年四月三〇日、勁草書房)参照。それによれば、女性にだけではなく、「貞操」の「男女平等」という考え方は、同時代においてそれほど突出していたという

けではなく、知識人階級においては広く支持されていた

という。しかし人びとの意識においては、それほど定着

してはいなかったかもしれない。また、高島智世

「貞操をめぐる言説と女性のセクシュアリティ―大正期

の女性メディアの言説を中心に―」（『名古屋大学社会学

論集』一六号、一九九五年三月三一日）によれば、大正

期から「男性を退廃した文化から救うのは女性の愛の力

であり、一人一人の女性の「気高さ」によって男性を感

化せしめるのだという主張」があり、「女性は、そうし

た社会の浄化の任を自ら命じて、崇高で美しい自己像、

あるいは自らの高尚な人格、純粹な精神の象徴として、

まさに「貞操」を位置づけたのであった」という指摘が

ある。吉屋の「良人の貞操」という問題提起も、こうし

た主張に連なるものとしてあつたと考えられる。

5 『大阪毎日新聞』一九三七年三月三〇日掲載広告など。

6 「一番苦心したのは水神の一夜 『良人の貞操』を書き

了へて」（『東京日日新聞』一九三七年四月一五日）で、

吉屋は「それはね、やつぱりあの水神の場面、加代と信

也の関係が自然に行かなければ、全体がめちやくちやで

すもの、あすまで持つていくのにとても一生懸命だつ

たわ、それでも早く二人を一緒にしろといふやうなこと

をいはれたんで、十回くらゐ思ひ切つて削つてしまつた

んですよ」と述べている。

7 「豪華俳優人で「良人の貞操」本読み」（『東京日日新聞』

一九三七年二月一日）

8 『東京日日新聞』一九三七年五月一日掲載広告

9 たとえば映画版では、加代と信也の関係発覚後、加代の

伯父が登場し、二人は別れさせられる。その後、伯父は

加代の娘を連れて北海道に去り、加代が吹雪の中、窓の

外から娘を見つめる場面がラストシーンとなっている。

また、加代は妊娠しない。

10 田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子』（一九九九年九月、朝

日新聞社）

11 『東京日日新聞』一九三七年五月一日掲載広告に「これ

は興味ある小説といふだけでなく男の道女の道を示した

貞操読本であり、全家庭に備ふべき人妻読本である。生

徒に勧められた女学校長（大阪樟蔭）のあることでも内

容が推測されよう。」とある。

12 小山静子「良妻賢母思想の再編」（『良妻賢母という規

範』一九九一年一〇月一五日、勁草書房）

13 「男の貞操」座談会（『婦人公論』一九三七年四月）。

出席者は太田武夫、杉山平助、丹羽文雄、今井邦子、吉

屋信子、宇野千代。

14 寺出浩司「生活文化論への招待」（一九九四年一二月四

〇日、弘文堂）

15 以下「良人の貞操」本文引用は全て初出『東京日日新

聞』に拠る。

16 鹿野政直『戦前・家』の思想』（一九八三年、創文社）

- 17 牟田和恵「セクシュアリティの編成と近代国家」(『岩波講座現代社会学』一〇「セクシュアリティの社会学」一九九六年二月九日、岩波書店)の「リスベクタビリティ」の概念を参考にした。
- 18 ここで忘れてはいけないのは、邦子と加代が正反対とはされつつもやはり同じ階層にある女性たちであるという点である。彼女たちの対極には、「無教養」な、卑しいとされる職業の女性たちの存在があり、この小説においてそうした女性たちは厳しい差別の対象となっている。一九三七年一月二一日
- 19 『婦人公論』一九三四年六月「若き未亡人の場合」号、「主婦の友」一九三四年八月「若い未亡人の生きていく道」特集などを参照。
- 20 映画と舞台で加代を演じた役者が、どちらも加代の難しさを語っていることは興味深い。映画で加代を演じた入江たか子は、加代について「難しい役だと思ふわ、もちろん加代ファンなんだけど、どういふ気持で信也と恋愛に陥るのかツてきかれても、まだわたしには解つてゐないのよ」(前出「豪華俳優人で「良人の貞操」本読み」と語り、明治座の舞台で加代を演じた花柳章太郎は、特に衣裳選びの面から、「芸者とか普通の人なら、衣裳もそう選択に苦心をしません、なにしろ未亡人で、江戸ッ児で、インテリで、清純で色気があつて、といふんですからなか／＼むずかしいんです」(加代の着る衣裳
- 21 夢のやうな青磁が似合ふ彼女 花柳章太郎さんの苦心談」『東京日日新聞』一九三七年四月九日)と語っている。ここには、加代という人物を表現しようとするときの困難の一端があらわれているといえるだろう。
- 22 前出小山静子「良妻賢母思想の再編」一九三七年二月二三日
- 23 邦子は加代に「みんなに『まだか』って、言われるたんびに、私、自分が不束みたいで身が細るわ」と話している。また婦人科医・長谷部の台詞として「万一子供だけ生れて居るのに、その時すでに母親の方は助からないなんて場合は——まつたく、医者もいま／＼しくなつて、母を殺して生れた子供を踏み潰してしまひ度くなるやうな気持もするんですよ」というものがある。
- 24 早瀬晋三「南方「移民」と「南進」」(『岩波講座 近代日本と植民地』5 膨張する帝国の人流)一九九三年四月、岩波書店)などを参照。
- 25 当然そうした自己拡張を南洋に求めていくことは植民地的な意識とは無関係ではないだろう。
- 26 一九三七年四月一三日
- 27 池田洋「吉屋信子さんの生活を覗く」(『話』一九三五年八月)、永田通次「良人の貞操」で吉屋信子は幾ら稼いだかをとこ糞喰への景気だ!!」(『話』一九三七年六月)などを参照。
- 28